『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（十一）

植木久行

●二二一番　白居易「王十八の　山に歸るを送り、仙遊寺に寄題す」「林閒煖酒燒紅葉、石上題詩掃綠苔」

○元和四年（八一九）、作者三十八歳、都長安での作（花房・朱・王）。翰林學士・左拾遺在任。諷諭詩の名作「新樂府五十首」が作成された年[1]である。王拾遺『系年』には、同年九月、「王質夫來訪す」として本詩を引く。これは、詩の第八句「菊花の時節（重陽節への連想をもつ）君が廻るを羨む」にもとづく推定であろう。

○（王十八）　白居易が京兆府盩厔縣尉[2]在任中（元和元年（八〇六）四月から翌年の秋まで）に知りあった親友、王質夫[3]を指す。十八は、いわゆる排行（祖父・曾祖父を同じくする一族閒における、同世代の男たちの出生順序）である。岑仲勉『唐人行第錄』「王十八全素（質素）」の條には、元稹の「二月十九日　王十八全素に酬ゆ」（冀勤點校『元稹集』卷十五）詩に着目し、この人物は、白詩中の「王十八質夫」と、「質・素（の二字）相切する（意味的に適合・近似する）が故」に、同一人かと推測し、今日ほぼ通說化する（花房・前川『元稹研究』三六頁や、卞孝萱『元稹年譜』三〇三頁など）。ただ岑仲勉自身は、「王十八全素（質夫）」という書き方をして、「質夫は王全素の字」（西村富美子『白樂天』）のようには明言していない。全素と質夫は、意味的な關連をもつ名と字に適合するが、詩題中に明示される排行下の名は、宋五之問・李十二白・杜二甫のように本名であるのが通例である。「朱大慶餘」（名は可久）の場合は、字で通行していたための例外、と考えてよい（『唐人行第錄』參照）。とすれば、「王十八質夫」「王十八全素」という呼稱は、別人の可能性を否定できない。朱金城『年

譜』『箋校』が王全素との關係に全く言及しないのは、このためであろうか。

ちなみに、岡村繁『白氏文集』（以下『文集』と略稱）三（竹村則行執筆）は、「名は質夫、號は全素」（四九頁）とするが、この場合も確證に乏しい。他方、二人の交遊關係を詳述する靜永健「王質夫と白樂天―白居易の盩厔時代―」[4]の附記には、岑仲勉の說を踏まえつつ、さらに元稹詩の作成された梁州（陝西省漢中市）の地が、王質夫の客死した梓潼（四川省梓潼縣）と盩厔（王質夫の隱棲地）とのほぼ中間點にあることなども考慮して、「名は全素、字が質夫」の同一人であるとする說を、「極めて信憑性が高い」と評する。しかしこれも、排行下の本名表記の慣習に對する注視を欠いており、ただちには首肯しかねる。確證に乏しい現時點においては、王全素と王質夫の二人を安易に結びつけて考えるべきではなかろう。

なお、西村富美子「『長恨歌』管見」[5]も、白・王二人の交遊を示す詩を列擧するが、仙遊寺付近の歷史地理に關する知見に乏しいのが悔まれる。

○〔山に歸る〕　歸隱先の山は、後述する仙遊寺のある仙遊山[6]（秦嶺山脈〔終南山〕の一峰）を指す。王質夫は、仙遊山の薔薇澗[7]（仙遊谷の別稱）に隱棲していた居士（＝處士）であり、白居易よりも若く、神仙說を信奉した。

○〔仙遊寺〕　京兆府盩厔縣の南境、終南山の山麓にあった寺院の名。現在の陝西省周至（もと盩厔と書く。現代中國語では同音）縣城の南約十七キロ、黑水峪（終南山に源を發する黑水〔黑河〕の流れる谷あい）の入口付近の、馬召鄕金盆村に、晩唐の咸通年間に分かれた三寺のうちの、二寺が殘存する（明淸期の建物）。西安市の西南約六十キロに位置する、この仙遊寺は、元和元年（八〇六）の冬十二月、盩厔縣尉在任中の白居易が、當地の仙遊谷に住む王質夫・陳鴻とともに訪れて、不朽の名作「長恨歌」を作った詩跡として知られる。白居易が折を見て、しばしば訪れた寺である。

寺の名は、隋の文帝楊堅が避暑のために建てた近くの離宮「仙遊宮」にもとづくらしい。隋代すでに仙遊寺の名が見え（唐の道宣『續高僧傳』卷十二、隋の釋童眞傳）、白詩に先立つ用例としては、盛唐の岑參「秋夜　仙遊寺の南涼堂に宿し、謙道人に呈す」詩や、李華「仙遊寺」詩、中唐前期の盧綸「仙遊寺に過る」詩などがある。淸の畢沅『關中勝蹟圖志』卷七にいう、「寺の四面は皆な山、黑水　其の門を經流す。蓋し奧區（深奧の地區）なり」と。約十キロ東には、道敎發祥の

地ともされる著名な道觀「宗聖觀」（樓觀）があり、唐代この付近は、俗世閒と遊離した道教的雰圍氣に滿ちあふれ、村の名も仙遊鄉という。詳しくは、愛宕元「唐代樓觀考――歐陽詢撰「大唐宗聖觀記」碑を手掛りとして――」[8]參照。同論文に載せる「樓觀附近圖」のなかには、仙遊寺關連の地名も書きこまれていて有益である。

なお、澤崎久和「白居易と仙遊寺」[9]は必讀の勞作であり、松浦友久編『漢詩の事典』[10]第Ⅲ章の、「仙遊寺」（植木執筆）も參照。川口本の補注（二六五頁）には、「明州の太白峰のふもとの寺」とあるが、明州は雍州（京兆府）の誤植であろう。仙遊寺の寫眞は、雷行・余鼎章主編『西安』[11]や、山口直樹『諷諭の詩人　白樂天』[12]などに見える。[13]

○〔寄題〕　遠方から詩を人に託して寄り、題きつけてもらう意。高木正一『白居易』下や西村富美子『白樂天』は、この立場であり、より具體的には、「王十八を送りつつ、この詩を寺にとどけさせ」（石川忠久『（漢詩をよむ）秋の詩一〇〇選』）、寺壁などに題きしるしてもらうことをいう。佐久注に「其地に往かずに題詠すること」とあり、一海和義『漢詩一日一首（秋・冬）』も、「直接その地へ行かず、遠くから思いを寄せて詩を作ること」とするが、少くとも本例の場合、「題」は第一義的には題壁を意味して、題詠ではない。[14]白詩では、本例を含めて、全九例みな詩題に用いる（『索引』）。たとえば、「餘杭（杭州）の郡樓に寄題して、兼て裴使君（夷直）に呈す」詩（卷36、後集卷17）にいう、「君に憑む　此の句を吟じ、望濤樓（詩題の郡樓）に題さんことを（下句の原文「題向望濤樓」の向は於の意）」と。ただし、白詩「忠州の小樓の桃花に寄題す」（卷19）などの題は、題詠の意と考えてよい。

○〔林閒…〕　二句（七律の頸聯）は、寺景を詠む頷聯とは異なり、一種の倒裝法を用いて、舊遊すなわち、王質夫とともに山寺の秋色を樂しんだ盩厔縣尉在任中の思い出を、風雅かつ色彩感豐かに詠んでいる。「寺院にて秋の興趣を賦したもの」とする大曽根注は、きわめて誤解を與えやすい。この二句は、あくまでも三年前（元和元年秋）の樂しい回想中の一場面である。

二人の詩酒の交遊は、元和十四年（八一五）に成る白詩「王質夫に寄す」（卷11）のなかにも、「詩を吟じて　石上に坐し、酒を引いて　泉邊に酌む」と歌われている。前掲の靜永論文にいう、この一聯には、「『林閒暖酒』の句そのままの情景が回想されていよう」と。

ちなみに、前掲の澤崎論文の注にも指摘されるように、北宋の詩人魏野（九六〇―一〇一九）「盩厔の知縣解旦著作に寄す」[15]詩の後半には、「（あなたは）閑（閑な時）には應に時に遊仙寺に到り、石上に詩を題して綠苔を掃（一作拂）ふべし」とあり、その自注に「樂天遊仙寺詩云、林間煮茗燒紅葉、石上題詩掃綠苔」とある。煖酒を「煮茗」（茗を煮る）に作るのは、白居易が飲茶の愛好者であるため、興味深い異文となるが、寺名を遊仙寺に誤る點とともに、單なる記憶違いであろう。あるいは唐宋兩朝の嗜好の相異にもとづくか。いずれにせよ、前掲の白詩「王質夫に寄す」にも、酒と詩が對をなし、煮茗に作る可能性は、ほとんどない。後の補注參照。

○〔煖酒〕『說文解字』卷十上、煖には、「溫（盈）むるなり。火に从ふ、爰の声」とある。宋版や那波本『白氏文集』にも「煖」に作るが、『文苑英華』卷二三七（宋版）などには、「暖」に作る。兩字は声義ともに同じで通用する。白詩の「煖（暖）酒」は、本例以外にも四例ある（『索引』）。そのうちの一例、「已に微陽（冬の日）の前に向かひ、酒を暖めて　詩袂を開く」（「懶放二首…」其一、卷29、後集卷3）と。

ちなみに、「煖酒燒紅葉」の句は、初唐の王績「杖を策いて隱士を尋ぬ」[17]詩に見える隱士の生活、「酒を置いて　枯葉を燒き、書を披いて　落花に坐す」と類似する。上句は、白詩と同樣に一種の倒裝法から成り、枯れ葉を燒いて酒もり（酒の燗）をすることをいう。下句の披は、披閱の意。

○〔紅葉〕六朝詩から初唐詩にあっては、色づいた木の葉を示す「もみぢ」は、「黃葉」[18]の字が大半を占めたが、盛・中唐以降になると、逆轉して「紅葉」の字が多く用いられた。[19]これは、中國では、紅葉・霜葉の美しさをめでる美意識の發達が遲れた結果、悲秋・嘆老感[20]を深める黃落・搖落の側面に、詩人たちの視線が注がれがちとなり、しかも「もみぢ」の景物を詠む用例自體が、あまり多くなかったからである。[21]唐詩の佳句を分類編纂した大江維時編『千載佳句』のなかに紅葉の部門がなく、「暮秋」の條に「もみぢ」を詠む詩が見えるのも、この意味で當然であろう。唐代の後期、ようやく悲秋感一邊倒から脫して、紅葉の美しさにめざめ始めた。白詩の紅葉と黃葉の用例數の差異、十一例[22]と五例は、このことを端的に物語っている。かくして杜牧の名作「山行」詩や、「庭に滿つる詩景（一作詩境）　紅葉を飄す」（晚唐の雍陶「韋處士の郊居」）などの佳句も生まれていく。この點は、『萬葉集』以來、一貫して「もみぢ」を賞美する日本とは大きく異なっている。[23]

白詩「江南にて天寶の樂叟に遇ふ」（巻12）の、「紅葉紛紛として　欹瓦を蓋ひ、綠苔重重として　壞垣を封ふ」は、本例と同じく紅葉と綠苔が對をなす。

ちなみに、たとえば書陵部本『朗詠抄』[24]の、「林閒ニ酒ヲアタタムルニ、別ニ火ヲ不レ用、紅葉ノ紅ナルコソ、自火ヨ」など、紅葉を燃えたつ火に見たてる舊說[25]の發生は、白詩「林錄事の　紅葉に題するに和す」（巻27、後集巻11）のなかに、初冬十月の霜葉の美しさを描寫して、「燒くに似たるも　火に因るに非ず、花の如くなるも　春を待たず」などとあることにもとづくか。

○〔石上〕　岩や岩壁の表面。

○〔題詩〕　詩を題きつける意。白詩は本例を含めて、二十四例ある（『索引』）。そのうちの二例、「東遊を想ふ五十韻」詩（巻27、後集巻9）の、「預め詩を題す壁を掃ひ、先づ海を望む樓（「望海樓」の名もかねる）を開かん」、「峽中の石上に題す」（巻17）。

○〔掃〕　「何事ニテモ　一イキニ、サラリトハラフ」意（伊藤東涯『操觚字訣』巻五）、「箒ニテハクコト」（荻生徂徠『譯文筌蹄』）。『私注』に掃を「拂」に作り、岩瀨文庫弘安本なども「拂」に作る（『校異和漢朗詠集』）。拂は、去・拭・除などの意を持ち（『一切經音義』巻33、拂柄の條）、掃と拂は類義語をなす。白詩「九日宴集、醉ひて郡樓に題す…」（巻21、後集巻1）に、「樓を掃ひ　席を拂ひて　壺觴を排ぶ」の句がある。拂は、「物ヲスコシツツ、チョッチョット、ハラフコト」（『操觚字訣』巻五）、「拂衣・拂拭・拂塵のように、強く擊って拂う動作」（白川靜『字統』）。拂の異文は、同訓による書き換えか。中國側のテキストには見えない。補注參照。

●二二二番　白居易「盧侍御と崔評事と、予の爲に黃鶴樓に於て宴を致す。宴罷みて同に望む」「楚思眇茫雲水冷、商声清脆管弦秋」

○元和十年（八一五）の晩秋九月、都長安から江州（江西省九江市）司馬に左遷される途中、鄂州江夏縣（湖北省武漢市）の名勝、黃鶴樓上での作（花房・朱・羅・王）。作者四十四歲。

同年六月三日、對藩鎭强硬策をとる宰相の武元衡が暗殺され、御史中丞の裴度も襲われて負傷する大事件が勃發し、都長安の人々を震慴・狼狽させた。太子左贊善大夫（正五品上）[26]、皇太子輔導の職）在任中の白居易は、憤激のあまり、早急に犯人を檢擧して國辱をすすぐべきことを、すぐさま皇帝に上奏した。しかし諫官に先立つこの上奏は、かえって越權行爲

として強く非難された。事態はさらに深刻化し、彼の母親の死をめぐる名教上の罪をもかぶせられて、結局仲秋八月[27]、都長安を追放されて江州司馬に左遷されることになった。白居易は即刻車馬で都を立ち、藍田から秦嶺を越え、商州で遅れてくる家族を待って合流し、武關を通り、襄陽（湖北省襄樊市）から舟に乗って漢江を下り、郢（えい）州を通って、長江との合流點、鄂州に着き、さらに長江を下って、初冬の十月、江州に着任した[28]。布目潮渢「白樂天の官吏生活―江州司馬時代―」[29]によれば、都長安から襄陽までで、すでに約四十日間の行程である。従って鄂州では、すでに九月中旬すぎであろう。

○〔盧侍御〕　名は未詳。侍御は中央政府の御史台に置かれた官名（殿中侍御史・監察御史の通稱）。おそらく藩鎮や諸使[30]などの僚佐、いわゆる令外の官の寄祿官（檢校官）であろう。あるいは當時の鄂岳觀察使柳公綽の使院に、後述の崔評事とともに辟召されて鄂州に滯在していた友人なのであろうか。王啓興ほか校注『明刻黃鶴樓集校注』（湖北人民出版社、一九九二年）にもいう、「二人は蓋し武昌の幕府の幕僚爲らん」と。岡村『文集』三（竹村執筆）や朱『箋校』は同卷（卷十五）の終りに收める白詩「盧侍御が小妓　詩を乞ふ、座上にて留め贈る」と見える人物と同一視する。しかし詩の配列順序に着目すれば、當該詩は朱『箋校』や花房『批判的研究』のごとく、江州での作と考えられる。この作成地（鄂州と江州）の異同を、朱『箋校』は、どう考えるのであろうか。にわかに贊否を決めかねる。

他方、王拾遺『系年』（一〇四頁）は、かつて長安の華陽觀で同居した盧汀（字雲夫）[31]を指すとするが、そもそもその人名考證自體が誤っており、從いがたい。また羅聯添『年譜』は、『唐詩紀事』卷四九に見える前侍御史內供奉官、范陽の盧貞と、官職が符合するところから、盧貞のことかと推測する。しかし朱金城「白居易交游續考」[32]の「盧貞　盧眞」の條によれば、盧貞が侍御史內供奉になったのは、約二十五年以後の會昌年間（八四一―八四六）の初めであり、この推測も誤りである[33]。

○〔崔評事〕　名は未詳。評事も、中央政府の大理寺（九寺の一）の官。これも單なる寄祿官であろう。王拾遺『系年』は、崔咸[34]、字重易、元和二年の進士、白居易が江州に到着後、「落花を惜しみ　崔二十四に贈る」を作った人と見なすが、論據が示されず、單なる憶測にとどまる。朱『箋校』羅『年譜』、岡村『文集』は、いずれも未詳・待考とする。

○〔黃鶴樓〕　唐代の鄂州城（＝江夏縣城。現在の武漢市武昌

區）西南隅の、長江を俯瞰する黄鶴磯（黄鵠磯。鶴・鵠は古字通用。磯は江中に突き出た岩山の意）上にあった。現在の黄鶴樓は、この蛇山（古名が黄鶴山・江夏山）下の黄鶴磯から東へ一キロ、蛇山の頂上に場所を移して再建されたものである。

黄鶴樓の創建年代は未詳であるが、一種の物見やぐら（見張り台）であったらしい。漢江がそそぎこむ長江付近、という交通幹線の要衝に位置していたため、唐代、樓上で盛んに送迎の宴が催され、盛唐の崔顥・李白・孟浩然らの詩中に詠みこまれて、雄大な長江の流れを一望できる武漢第一の詩跡となった。本詩は、鄂州に假寓するらしい二人の友人が、失意の作者を慰める酒宴を、「荆吳形勝の最（第一）」（後引の「黄鶴樓記」）たる黄鶴樓上で催してくれたことを感謝する。

唐の永泰元年（七六五）に成る閻伯瑾「黄鶴樓記」[35]にいう、「『圖經』に云ふ、費禕登仙し、嘗て黄鶴に駕りて、此に返憩す。遂に以て樓に名づく」と。詩跡黄鶴樓については、松浦友久編『校注唐詩解釋辭典』「黄鶴樓」詩の條（水谷誠執筆）、寺尾剛「李白における武漢の意義―「詩的古跡」の生成をめぐって―」[36]、松浦友久編『漢詩の事典』第Ⅲ章「黄鶴樓」の條（植木執筆）など參照。

○〔致宴〕　宴席を設けてくれる。『全唐詩』巻四三八や和刻本・佐久節譯注本は、致を置に作る。兩者はほぼ同意であるが、致宴のほうが友人に對する敬意がこもる。

○〔楚思…〕　本句は、樓上から遠望したときの感慨を詠む。いわれなき處罰を受けて楚の地を左遷されゆく私の憂思は、滔々と流れゆく長江のように限りもなく廣がりゆき、前方に果てしなく廣がる白雲と長江（あるいは白雲を浸して流れゆく長江）の眺めは、荒涼としてわびしい、の意。

○〔楚思〕　「楚客之思」（『私注』『集註』など）の略。『集註』に、「屈原汨羅に流されたる事を、[37]樂天の身の上に比して楚思といふ也」[38]と指摘されるように、讒言されて都を追放された楚客屈原の憂思に、同様な境遇下に置かれた作者のそれをなぞらえて表現した。白詩にはもう一例、同じ江州司馬在任中の元和十二年（八一七）ごろの作、「湖上の閑望」詩（巻16）に、「閑かに水芳（水べや水中の花）を弄でて　楚思を生じ、時時　眼を合して　離騷（屈原の代表作）を詠ず」とあり、同じく楚思の語に、屈原に對する一種の共感をこめて詠んでいる。

一説に、楚思を「楚囚の思、故郷を思ふ情の切なること」（野村八良校訂『古代歌謠集』）[39]とする。[40]南朝・宋の鮑照の詩「王宣城（僧達）を送別す」に、「郢（楚の都）を發して楚思を

流し、淇（水）を渉りて衞情を興す」などは、この用例であるが、白詩の場合、無念・失意の氣持が深くこもっていよう。

○〔眇茫〕　宋版『白氏文集』以下、みな「淼茫」に作る。淼茫の語は、すでに柿村『考證』に指摘されるように、東晉の郭璞「江の賦」（『文選』巻12）に、「（長江の）狀は、天に滔りて（天空にまで水がみなぎって）以て淼茫たり」とあるのを踏まえて、水面が廣々と果てしなく續くさまを描寫する雙声語。『私注』などに「遥かなる貌」とあり、國會圖書館本『和漢朗詠注』[41]の一説に、「廣き貌」とある。白詩の淼茫は、本例を含めて四例ある。二年後の元和十三年、江州司馬在任の作、「九江春望」詩にも、「淼茫たる積水は　吾が土（故郷）に非ず、飄泊せる浮萍（浮き草）は　是れ我が身」（巻17）とあって、廣漠たる水景は、主として北方で育った作者の胸中に、ある種の異和感を生み、郷愁をさそう要因となったようである。

『校異和漢朗詠集』によれば、淼字に作るものも數本ある。眇茫の語はおそらく、淼・渺の二字が同音同義[42]であるところから、まず「渺茫」となり、續いてサンズイが脱落して、同系の通用する「眇茫」になったのではなかろうか。前田侯爵家所藏傳二條爲氏筆本には、「淼」字の傍らに「渺」字が朱書されている（『校異和漢朗詠集』）。

ちなみに、柿村『考證』に「淼眇義同じ」とある。二字は確かに同系の言葉であるが、第一義的に水面の無限の廣がりを意味するかどうかで、若干ニュアンスが異なる。この意味で、「楚客の情渺茫として江のはてしなきが如く」云々と譯する柿村『考證』の説は、改めて留意されてよい。なおこの「眇（淼）茫」は、前句の述語が後句の副詞を兼ねる、廣義の兼語式をなす特殊な表現である。「楚思眇茫たり」と、「眇茫として雲水冷じ」の二意を持つ。

○〔雲水冷〕　雲水の水は、黄鶴樓下を滔滔と流れゆく長江を指す。『私注』に「水廣ければ、則ち雲を浸すに似たり。故に『雲水』と曰ふ」とある。また『六注』には、「雲水トハ、秋ハ雲ノナリモ物サヒシク、水ノ音モスサマシキ義也」と指摘する。柿村『考證』も、「江水は遥か雲に接して見渡すかぎりすさまじき」と譯す。つまり「冷」は、「物哀れなる」（『集註』）、「荒涼」（『新釋』・川口文庫本・大曽根譯など）の意。岡村『文集』の、「遥かに廣がる雲や川のすがすがしい秋景色」云々とする譯文には從いがたい。

白詩の「雲水」は、本例を含めて十五例に及ぶ。「惆悵す

香山　雲水冷なるを、明朝　便ち是れ　獨遊の人」（「龍門にて皇甫澤州の任に赴き、韋山人の南遊するを送別す」巻32、後集巻13）は、その一例。

○〔商声…〕本句は、上句の視覺に對して、聽覺を通した感慨を表わす。折から聞こえてくる商の、もの悲しい声は、清く澄みわたって胸をゆさぶり、樓上の宴席で私を慰めるために演奏された管弦の響きも、哀怨な商（商を主音とする旋律・歌曲）の調べをただよわせて、萬物凋落の秋の悲しみをそぞろにかきたてる、の意。要するに頷聯は、本詩の終りにいう「愁ふ堪き」景を詠み、續く頸聯が「賞づ堪き」景にあたる。前掲の『明刻黄鶴樓集校注』参照。

○〔商声〕ここでは、①秋声、②商調（商声）の両意を兼ねる。①の意は、中國古代音樂の五つの基本音「五音」（宮商角徴羽）を四時に配當すると、商は秋にあたるためである。商風・商秋・商氣などの商も、同様である。「商声」の語は、早くも『私注』に指摘されるように、阮籍「詠懐詩十七首」（其十）に、「素質（草木の色あせ衰えた姿）は　商声に遊り（もとづき）、悽愴として　我が心を傷ましむ」とあり、唐の李周翰は、「商声は秋の声なり」と注する（『文選』巻23）。「秋の声」といえば、初唐の蘇頲「汾上にて秋に驚く」詩の著名な用例、「心緒　搖落に逢ひ、秋声　聞く可からず」[43]が、ただちに想起されるように、秋声は、萬物凋落の秋に生じる、さまざまな哀切な声（秋風、落葉、渡り鳥や秋の蟲の声など）を總稱する。『六注』や『假名注』に「秋風の音なり」とあるのは、秋声の代表を指摘したもの。黄侯・李遠源・汪昭才選編『黄鶴樓詩詞曲選（詳注）』[44]は、商声を秋声と注したうえで、「秋季寒風凄厲（すさまじい）之声」を指すとする。岡村『文集』も、この立場であるが、「秋風もさわやかに吹く」と譯すのには從いがたい。この秋風も、「聞く可からざる（聞くに堪えない）」哀切な響きの一種として理解すべきであろう。

②の商調（商音）は、凄涼・哀怨・悲壯な調べをもつとされる。『淮南子』覽冥訓に、「瑟　絲を咀いて　商弦絶ゆ」とあり、後漢の高誘は、「商は五音に於て最も細にして急なり」と注する。また中唐の詩人李賀「李夫人」の、「孤鸞驚き啼いて　商絲發る」の句に對して、清の王琦は、「商声は秋声爲り。……　五音の中、惟だ商声のみ最も悲し」（『李長吉歌詩彙解』巻一）と注する。さらに王叔岷『陶淵明詩箋證稿』巻四も、「荆軻を詠ず」詩の「商音に　更も涕を流す」句に對して、商声は哀声であると考證する。[45]佐久注の「哀調な

り」は、このことをいう。

國會圖書館本『和漢朗詠注』に見える、「商ノ響キハ、秋風ニ似テ脆ケレハ、秋ハ、自然ノ管弦有リト作給也」とする説は、穿ちすぎであろう。

最後に、對句上の字義的關連を考えれば、楚思と商声は、一種の借對[46]（形式上だけの對。詩中では甲の意味を用いながら、別の乙の意味を借用して對應する語と對をなす）であろう。商は古代の殷王朝の正名（さらには春秋時代の宋國の別稱）でもあるからである。

○〔清脆〕　音声が清く澄みわたり、すっきりと齒切れがよい意。上句の「眇（淼）茫」と雙声對をなす。柿村『考證』の「清くあはれなる」、川口注の「清らかでもろくはかないさま」、大曽根注の「清らかでもろい」などは、いずれも不適切。清脆は一種の類義語として、音声が冴えて響くことをいう。白詩「小曲新詞二首」（其一、巻18）に、「霽色鮮宮殿、秋声脆管弦」とあり、岡村『文集』四（竹村執筆）が、後句を「秋声　管弦脆らかなり」と訓むのは、きわめて妥當である。白詩の清脆は、本例を含めて三例あり、その一つに「玲瓏たり　曉の樓閣、清脆たり　秋の絲管（管弦）」（「皇甫郎中の『秋曉、同に天宮閣に登りて懷ひを言ふ』に和す六韻」巻29、後集巻3）とある。清脆と對をなす玲瓏も、やはり雙声である。

本例の清脆は、上句の「眇（淼）茫」と同じく、廣義の兼語式表現をなし、「商声清脆たり」のほか、「清脆として管弦秋なり」の意を内包する。國會圖書館本『和漢朗詠注』が、「樂ノ音ノサヘタル心也」とするのは不十分であり、書陵部本『朗詠抄』に、「管弦ノ音ノスメルニ、秋ノ音スメルニ」云々とするのが妥當である。

○〔管弦秋〕　佐久・岡村譯注本に、「商声清脆なり（たり）管弦の秋」と訓む。しかし本例が律詩の頷聯を形成する一組の對句であることを考えれば、「商声清脆として　管弦秋なり」とする、古點の訓みかたに從うべきであろう。冷と秋とは形容詞としての對であり、「秋なり」（秋らしい、秋めく）とは、萬物凋落の深秋らしい、さむざむとした響きをたたえる意。名詞を形容詞に轉用した用例[47]である。

ちなみに管弦は、もちろん盧侍御と崔評事の二人が、作者の失意を慰めるために設けてくれた酒宴の音樂を指す。『集註』にいう、「黄鶴樓に酒宴をなす時、管弦して樂しむと雖、猶秋の声、秋の氣色の物悲しき心こもれり」と。中國における悲秋のイメージについては、松浦友久「中國古典詩におけ

る『春』と『秋』」（注20）や、拙稿『唐詩歳時記』参照。

白詩には、さらに二例、「管弦秋」の語を用いる（『索引』）。その一つ、「河陽の石尚書（雄）、迴鶻を破り……」詩（巻37、後集巻17）にいう、「畫角三声　刁斗の曉、清商一部　管弦の秋」と。この場合の秋は、上句の曉と對をなす名詞。

注

（1）本稿（七）一九二番（『中國詩文論叢』第十三集）参照。

（2）本稿（六）一七五番（『中國詩文論叢』第十二集）参照。

（3）堤留吉『白樂天研究』（春秋社、一九六九年）第六章参照。

（4）九州大學文學部『文學研究』第九三輯、一九九六年所收。

（5）『神田喜一郎博士追悼中國學論集』二玄社、一九八六年所收。

（6）元和三年（八〇八）に成る白詩「翰林院中感秋、懐王質夫」（巻九）の自注に、「王は仙遊山に居る」とある。

（7）白詩「和王十八薔薇澗花時、有懐蕭侍御、兼見贈」（巻十三）参照。

（8）吉川忠夫編『中國古道教史研究』同朋舎出版、一九八二年所收。

（9）福井大學『國語國文學』第三六號、一九九七年所收。

（10）大修館書店、一九九九年刊。

（11）中國歴史文化名城叢書、中國建築工業出版社、一九八六年。

（12）學習研究社、一九九六年。

（13）仙遊寺付近は、黒河の上流に建設されるダム（二〇〇二年完成預定）のために水没してしまうため、寺の建物は近くの山の上に移築されるという。前掲の澤崎論文の注（16）や、静永健「水底に沈む唐詩の風景―白居易曽遊の地、仙遊寺訪問の記」（『新しい漢字漢文教室』二八號、一九九九年）参照。

（14）この意味で、岡村『文集』三の「遠地にあるものを、その地に赴かずに題詠すること」も適切ではなく、内田泉之助『白氏文集』（明德出版社、一九六八年）の「その地に赴かず、遠方から題をつけて書き贈ることをいう」も、同じく妥當ではない。

（15）北京大學古文獻研究所編『全宋詩』第二册、巻八三、九三九頁所收。魏野の別集『鉅鹿東觀集』巻八所收。補注参照。

（16）布目潮渢「白居易の喫茶」（『三上次男博士喜壽記念論文集』平凡社、一九八五年）所收。

（17）詩題は、「盧新平宅賦古題、得策杖（尋）隱士」にも作る。「策杖尋隱士」は、『文選』巻二二に收める左思「招隱詩」二首（其一）中の句。

（18）佐竹昭廣「古代日本語における色名の性格」（同『萬葉集抜書』岩波書店、一九八〇年）によれば、古代日本語における色名（色彩語）は、赤・白・青・黒の四種だけであり、黄

色は赤のなかに包含された（赤色の感覺で捉えていた）という。同論文の注（15）には、上村六郎『萬葉染色の研究』を引いていう、「我國上代人が、赤土と黄土と赭土とを、共に「阿加都知」として、同じ様に考へてゐた」と。また佐竹論文は、四種の色名は、本來、「明—暗」「顯—漠」という光の二系列を表す用語の轉用であるとする。また別の佐竹論文「語彙の構造と思考の形態」（『萬葉集拔書』所收）も、中國の色彩を考えるうえで、有益な示唆に富む。たとえば、青は白と黑の中間に位置し、雙方に融合しうる性質を內在させる、など。

(19) 小島憲之『上代日本文學と中國文學　中』（塙書房、一九六四年）第五篇第四章や、本稿（八）一九四番「黃葉」の條（『中國詩文論叢』第十四集）など參照。

(20) 松浦友久「中國古典詩における『春』と『秋』」（同『中國詩歌原論—比較詩學の主題に卽して—』（大修館書店、一九八六年）や、拙著『唐詩歲時記』（講談社學術文庫、一九九五年）など參照。

(21) 辻田昌三『古代語の意味領域』（和泉書院、一九八九年）に收める「『黃葉』の文字について」參照。

(22) 平岡・今井『索引』は、「林紅葉初隕」も、紅葉の用例に加えて十二例とする。

(23) 渡邊秀夫『詩歌の森—日本語のイメージ—』（大修館書店、一九九五年）參照。

(24) 伊藤正義・黑田彰編著『和漢朗詠集古注釋集成』第二卷下（大學堂書店、一九九四年）所收。

(25) 『六注』や『假名注』（注24所收）など。

(26) 『舊唐書』卷四四、職官志による。

(27) 元稹「樂天の『東南行』詩に酬ゆ一百韻」（『元稹集』卷十二）詩の自注に、「八月、聞樂天司馬江州」とともに、「八月、樂天之江州」の記載もある。

(28) 『舊唐書』白居易傳、花房英樹『白居易研究』、平岡武夫『白居易』、後引の布目論文など參照。

(29) 『立命館文學』一八〇號、一九六〇年所收。

(30) 礪波護『唐代政治社會史研究』第三章や、戴偉華『唐代使府與文學研究』（廣西師範大學出版社、一九九八年）など參照。

(31) 本稿（一）二七番（『中國詩文論叢』第七集）參照。

(32) 朱金城『白居易研究』（陝西人民出版社、一九八七年）所收。

(33) 當時、二人の盧貞がおり、『唐詩紀事』の記載には誤りがある。詳しくは朱金城の前揭論文や、郁賢皓・陶敏『唐代文史考論』（洪葉文化事業有限公司、一九九九年）に收める「『全唐詩』作者小傳正補」など參照。

(34) 『舊唐書』卷一九〇下や『新唐書』卷一七七の本傳參照。

(35) 『全唐文』卷四四〇所收。『文苑英華』卷八一〇（明版）にも收めるが、作者名を閻伯里に作る。

(36) 『中國詩文論叢』第十一集、一九九二年所收。

(37) 左遷地を汨羅とするのは不適切。ここでは都を追放されたことをいうと考える。

(38) 川口本の補注に、「『悲しいかな、秋の氣たるや』とうたった楚の屈原のおもかげがある」と評するが、「悲しいかな」云々の作者は屈原ではなく、その弟子とされる宋玉である。

(39) 有朋堂書店、有朋堂文庫、一九二六年。

(40) 金子・江見『新釋』も、同じ立場である。『左傳』成公九年の故事を踏まえる。

(41) 注24の書、ただし卷上（一九九四年）所收。

(42) 『漢語大字典』第三卷一六三頁など參照。

(43) 松浦友久編『校注唐詩解釋辭典』の拙稿參照。

(44) 武漢出版社、一九八九年。

(45) 「案燕策三、『爲變徵之声、士皆垂淚涕泣』（又見史記刺客傳）、水經易水注引燕丹子、『爲壯声、士髮皆衝冠、爲哀声、士皆流涕』（又見意林）。『商声』卽『哀声』、亦卽『變徵之声』、淮南子地形篇所謂『變徵生商』是也」。

(46) 王力『漢語詩律學』（中華書局香港分局、一九七三年）第一章第十五節や、同『詩詞格律』（中華書局、一九七七年）第二章第四節など參照。

(47) 清水茂「『春』『秋』之詞性」（同『中國詩文論藪』創文社、一九八九年所收）によれば、用言性を持った春・秋の用法は、齊・梁ごろに始まり、南北朝の末には、かなり廣く行われていた。しかもその多くが押韻の箇所に使用されている。本例も韻字となる。

(48) 一斗入りの炊具と、警戒のために打ち鳴らすドラとを兼ねた、銅製の行軍用具。

※ 本論文以降、假名づかいは、訓讀文の和訓のみ舊假名づかいとし、その他はすべて新假名づかいとする。

※ 〔補　注〕 內閣文庫に所藏する魏野の別集『鉅鹿東觀集』（乾隆四庫全書無板本）卷六によれば、遊仙寺を正しく「仙遊寺」に作り、自注の冒頭は、「白樂天遊寺詩云」である。また本文・自注のいずれも、掃字を「拂」に作る。

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（十一）（植木）